1997 年の国際千島列島調査

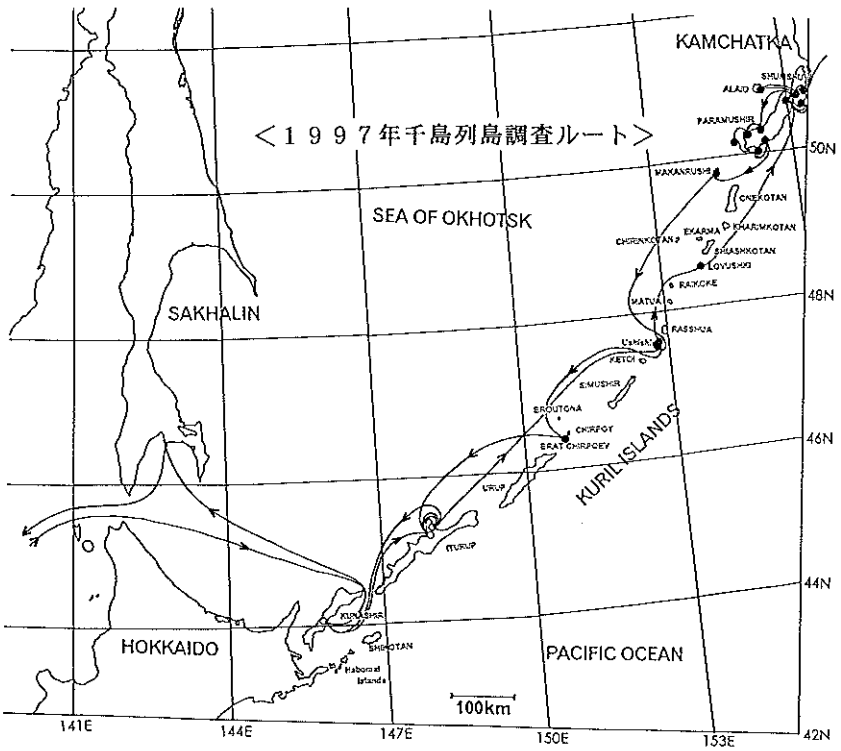
札幌市　高 橋 英 樹

1997 年夏の国際千島列島調査（International Kuril Island Project：IKIP）に参加し、千島の植物相を調査した。上陸できたのは北からアライト、シュムシュ、パラムシル、シリンキ、マカンルシ、ウシシル北・南、ブラットチルポイの各島で、このうちシリンキ、ブラットチルポイの植物相はこれまで報告されておらず、特にシリンキ、ブラットチルポイの 2 島には戦前の館脇博士も上陸していないようである。さらに隊員の 1 人はロブシュキ岩礁に上陸して貴重な植物標本をもたらしてくれた。これもまた植物としては初記録である。

幸いなことに 1995 年から 3 年間このプロジェクトに参加できたので、中～北千島の各島の植物相についてはこれでほぼ全容をつかむことができた。これらの成果については少しずつ発表し始めているが、本稿は 97 年調査を日付を追って紹介し、記録として残すことを意図した。

7 月 19 日

飛行機で千歳から新潟まで移動。日本からの参加者は魚、昆虫、クモ、貝、そして



植物を専門とする５人で、新潟のホテルで落ち合う。

7月20日

北千島、特にパラムシルは熊が多いことで有名な島なので、熊撃退用スプレーを用意していた。これが新潟空港で引っかかった。スプレー類は絶対に飛行機に乗せられないとの事で空港留置となってしまった。荷物は５人で160キロオーバーとなり、11万円の追加料金。到着したウラジオストック空港でも新たに持込み荷物に関税をかけられる。経済困難なロシアとしてはいろいろな名目で外貨を稼ごうとしているようだ。夜にはウラジオストック金角湾に停泊しているロシア科学アカデミーの調査船「プロフェッサー・ボゴロフ」に乗り込む。

7月21日

朝から霧雨。午後からウラジオストック市内に買物にでかける。銀行でのレートは１ドルが約50ルーブルだった。主にビール・ジュース類を調達する。そもそもロシアに関わり始めた92年当時の極東には商品がほとんどない感じだったが、ここ２、３年で格段に豊富になった。ウラジオストックでは車は日本の中古車、食料品は韓国産といった風である。ただ治安は次第に悪くなっているようで日本人の１人歩きはしない方が無難である。

7月22日

米の研究者も既に昨晩着いているが、荷物の積み込みに手間取り出航できない。調査全体を通じて言えることだが、これからどうなるかの情報がほとんど知らされない。忍耐を要すると言えば聞こえはいいが、ほとんど諦めの境地に達しないとロシアとはつきあっていけない。やることもなく夜９時半には寝てしまう。

7月23日

朝の２時半に起こされ、これから係官によるビザの確認という。これなども事前に全く知らされていない。朝６時くらいにはウラジオストックを出航して日本海を北上し始める。

7月24日

朝８時半、日本海の濃霧の中、留萌沖を北上。今回は貝の専門家の桑原さんがまめにGPSで緯度経度を落し、パソコンに入れてきた地図上に即座に表示するという技を演じてくれた。これで情報のない船の旅でも大概航路の予測がつき助かった。例年通り夕方からミーティングがあり、参加者の顔合せと野外調査での注意がされる。

7月25日

朝８時半にはすでに宗谷海峡をこえてオホーツク沖を南下、国後島の太平洋側に位置するユジノクリリスク（古釜布）を目指す。夜中に国後と択捉の間を通過して太平洋に抜けたようでだいぶ揺れ、机の上に置いていたワイルド・ターキーが落ちて割れる。

7月26日

朝早く国後島ユジノクリリスクに到着したようだが、濃霧のため全く見えない。昼からパスポートとビザチェックの係官が乗船してくる。時折霧が晴れると他の船も見えだし、湾内に停泊している事が分かった。

7月27日

国後島ユジノクリリスク停泊。米・露の研究者は上陸、例によって日本人は外務省の方針にそって上陸できない。いつになったら日本人による南千島の調査研究が自由におこなえるようになるのか。今日もまた濃い霧である。

7月28日

昨日と同じく濃霧である。もともと霧の多い千島だが、今年はそれに輪をかけて霧が多かった。その分、比較的天候は落ちついていることが多かったので採集には幸いであった。但し景観写真を撮ろうとするとなかなかよい機会がない。国後島に上陸したアメリカ人研究者の話によると、島のオホーツク海側は天気が良く暑いくらいだが、太平洋側に帰ってくると寒くて霧があるとのことだった。夏のあいだはこれが国後や択捉の普通の気候なのだろうと思う。夕方4時くらいになってやっと出航する。

7月29日

朝4時に択捉島クリリスク（沙那）に到着。給水の許可をとっているとのこと。米・露は上陸するが我々日本隊はまたもや待機。船はいっこうに出発せず船員は釣りを始める。やがて魚の専門家の尼岡先生も標本採集と称して竿を出し始める。

7月30日

朝4時くらいにクリリスクを出航し、半島をかわして反対側にあたる沙万部に給水に立ち寄る。天気は珍しく晴れて、ここでも皆釣りを始める。

7月31日

昼近くになってもまだ給水を続けている。近くにいた漁船が横付けしており、そちらにもホースで水を回している。どうりで時間がかかる訳である。ロシア人の船員同士で物々交換もやっている。午後2時半ころになってやっと出発する。

8月1日

昼前にウシシル南島に到着。懐かしいクラテルナヤ湾が眼前に広がる。ロシア科学アカデミーの別の調査船「プロフェッサー・ガガリンスキー」が停泊している。日本の報道関係を連れてきているとの事である。数年前にNHKで放映された千島列島の特別番組以来、ウシシル島はすっかり有名になったようである。上陸すると昨年世話になった海洋生物学者のタラソフ博士や日本人数人がいた。絶好の天気に恵まれたので我々は尾根まで早く上がろうと先を急ぐ。尾根筋からクラテルナヤ湾の絶景が見渡せた。湾の反対側も、ウシシル北島、そのまた北側にはラシュワ島、マツワ島まで見え絶景である。こんな風景を見られる機会はそうはないだろう［写真1・2（グ

ラビア)]。

8月2日

「プロフェッサー・ボゴロフ」はウシシル北島側に回り込む。昨日の天気とはうって変わって深い霧である。上陸用ボートは右往左往して上陸地点を見つけるのに30分以上かかった。南島は水没した噴火口クラテルナヤ湾を取り巻く急斜面の山並なのに対し、北島は低平な段丘の島で、まったく地形が異なる。この2島が砂州でつながりかかっているのだから、奇妙きてれつな兄弟島である。段丘に上がりイワノガリヤスの草原を抜けると、植生は地衣類をまじえるツンドラである。矮性のヤナギやタカネナナカマドは多いのだが、南島と同様にハイマツは見られない。

8月3日

ロブシュキ岩礁に到着。トドの繁殖地としてこれもNHKの放映以来有名となる。今回も、同乗していた韓国の放送局が撮影したいとの事で寄ることになった。日本隊から1人のみボートに乗れるとの事で、1番若い桑原さんが行く。こんな岩礁にも植物が生育していたとのことで、標本を取ってきてくれた。ハマニンニクやトモシリソウがあるのはよいが、イシノナズナがあるのはおもしろい。この植物は北千島ではほとんど見られずカムチャツカにもないのに、中部千島とアリューシャンにある。海鳥による長距離散布の例と思われる。夕方6時に移動しはじめ、8時すぎには左手にシャシコタン島を見ながら北東へと向かう。

8月4日

パラムシル島セベロクリリスク（柏原）港に到着。午後から港にあがり警備隊のトラックで町の北側にあたる湖周辺で採集する。

8月5日

セベロクリリスク港に上陸。昨日と同様にトラックを使い、今度は町の北東の山道を上がっていくが、あえぎながらという感じで時々エンコする。中腹からは登山道らしき道があり登山となる。途中の谷筋には雪渓が残っており、台地上の鞍部はエゾツツジ、ガンコウラン、キバナシャクナゲ、ミネズオウなどからなる大規模な高山草原となっている。しかしやはり霧が深く、眺望はきかない。

8月6日

シュムシュ島に上陸予定だったが風雨が強くなり上陸をあきらめ、船は低気圧を避けて迷走状態となる。夕方5時にはカムチャツカ半島先端の南西沖、北緯51度付近に停泊。

8月7日

昼頃にはシュムシュ島の北東端、小泊崎沖に達する。強風で白波が立つ中、ロシア研究者はゴムボートで上陸を強行すると言う。日・米の研究者は危険と判断し参加しないことにする。昨年は船長に権威があり、さらに海洋を専門とする研究者もいたの

で、上陸にあたっての危険性は的確な判断がされた。今年は船長の影が薄くしかも海洋の専門家もいないので、上陸可能かどうかの判断があいまいでしごく危険である。幸いなことに夕方になって凪いできて、ロシア研究者も無事帰還する。

8月8日

午前10時半、シュムシュ島小泊崎の南に上陸。今日は波も穏やかで、「何も昨日の午後危険を冒してまで上陸を試みることもなかったのに」、と陰口をきく。海岸斜面や段丘上の草原でハナシノブ属、チシマヒエンソウ、チシマハマカンザシなど北方系の種類を採取した［写真3・4（グラビア）］。

8月9日

シュムシュ島の太平洋側、別飛沼の北側に上陸。ゆるやかな海岸段丘列の斜面によい草原がありアツモリソウを数株見つけた。

8月10日

シュムシュ島中川湾に上陸。海岸から段丘上の湿草原を中心として採取、キンロバイが多く見られる。午後から上陸地点裏の渓流沿いに湖まではいる。湖畔には第二次大戦中に撃墜されたのか、飛行機の残骸が残っていた。

8月11日

パラムシル島ウステニー川に上陸。ここは昨年も上陸したところだが、今回は池塘と周辺のミズゴケ湿地を調査し、ヒメカンバがあることを確認した。

8月12日

アライト島東端アライト湾に上陸。武富島の南に国境警備隊の廃墟群がありすでに誰も住んでいない。最初からミヤマハンノキの群落を抜けて火山灰斜面まで行き着くことを目標にして歩き始める。2時間くらいで標高300メートル位、苦労してミヤマハンノキ群落を抜け何とか火山斜面に出る［写真5（グラビア）］。火山灰で焼けたミヤマハンノキが白骨状に残っている。新しく侵入しているのは、草本では海岸植物のハマニンニクである。ところどころでミヤマハンノキが萌芽しており、木本ではオノエヤナギも侵入している。標高500メートルの雪渓まで達して下山する。アライトヒナゲシを探したがどこにも見つからない。こんなはずはないと海岸に下りてきたら、湖近くの火山灰の露頭にかなりの株があった。どうやらアライトヒナゲシは海岸など標高の低いところの火山灰性の裸地にあるのが普通のようである。

8月13日

パラムシル島のオホーツク側、加熊別湾に上陸。私は標本整理が追いつかなくなりパスする。一日中押し葉標本の新聞紙替えである。

8月14日

パラムシル島のオホーツク側、鯨湾に上陸。海岸近くの渓流わき斜面に雪渓が残っている。このふちにエゾコザクラが多く、

この季節にも関わらず花をつけていた。ただ周辺の草むらには新しいクマの糞があったりしてあまり気持ちがよくないので、早々と海岸に引き上げる。反対の段丘上草原を探索するがミヤマハンノキのやぶが迷路状に広がっておりなかなか先に進めない。渇れ沢の中でタニギキョウを見つけたのが収穫のひとつであった。海岸沿いの裸地にアライトヒナゲシを見つける。

8月15日

深い霧の中アンティシフェロワ（シリンキ、志林規）島の北側に上陸。この島はパラムシル島の南西にぽつんと孤立した小さな島である。地形などの印象はチリンコタン島に似ており、海岸ぞいのやや急な流れのない沢沿いに上がれたのみである。沢を上がって行くとエトピリカが巣から次々と飛び立つのには驚いた。

午後にはパラムシル島に移動し、バシリエワ湾（武蔵湾）の西端に一部隊員が上陸する。

8月16日

パラムシル島南西部のバシリエワ湾東端に上陸。ここは去年も上陸したところなので大体の様子はわかる。私は右手の飛行場跡地周辺の湿った草原を探索し、ここでもヒメカンバを確認した［写真6（グラビア）］。逆の方に行った貝学者の棄原さんと昆虫学者の大原さんは干上がった池でアカマロソウを発見する。全長1センチに満たないアブラナ科の植物で、戦前に大井次三郎・吉井良次によって「珍奇植物」として紹介された植物である。

8月17日

パラムシル島の太平洋側、乙前湾に上陸。海岸から少し入ると熊道だらけで糞が所々に落ちている。小さな渓流沿いにもアキタブキの群落があった。戦前の館脇先生の報告ではアキタブキはパラムシル島から報告されていなかったので、人により導入されたものかとも疑っていたが、自生のものも確かにある。

8月18日

マカンルシ島南崎の西端に上陸。鞍部のべったりはったミヤマハンノキの周辺に寄生植物オニクがにょきにょき出ている様は、木と草のサイズが逆転してしまったようでおもしろい。同様の光景は95年にラシュワ島でも見た［写真7（グラビア）］。

8月19日

ウシシル南島に停泊。タラソフさんたちが残していった機材を回収し、夕方7時くらいに移動しはじめる。

8月20日

ブラットチルポイ島の北西に停泊する。左手にはチルポイ島も見える。ブラットチルポイが今回最後の上陸地点となる。海岸沿いの草原斜面を中心に採取する。ここまで南下してくると温帯要素がかなりある。アメリカのクモ学者ロッドがここで左手を落石でつぶすアクシデントがおきる。長丁場の調査も最後になってくると注意力が散

漫になってきて思わぬ事故もおこる。

8月21日

エトロフ島クリリスクに到着しロッドを病院に送り込む。結局ここでは対処できずサハリンのユジノサハリンスクの病院へ飛行機で飛ぶこととなる。ロッドが出発したあと船は半島を回り込んで給水場所の沙万部へ向かう。

8月22日

エトロフ島沙万部で給水。

8月23日

クナシリ島ユジノクリリスクに到着。ビザや関税のチェックをやって夜9時ころに出発。

8月24日

オホーツク沖をサハリン目指して北上。夜の10時半くらいにコルサコフに着き、治療を終えて待機していたロッドを乗せると夜中の12時すぎにはすぐ出発する。

8月25日

宗谷海峡を西進、午前9時ころに右手にモネロン島の島影が見え左手には日本の船が何隻かみえる。

8月26日

朝8時、沿海州のエゴロワ岬内に入る。すでに待機していた科学アカデミーの調査船「オパーリン」と落ち合い、上陸用のボートを受渡すとすぐに南下。

8月27日

朝、ウラジオストック金角湾に帰着。午後から市内の博物館を見学に行き、ホテルの売り場で買物をする。

8月28日

船から空港まで移動。途中のウラジオストック郊外では沿道に市民のスイカ売りが目だつ。ツリフネソウとヤマハギの花も目につく。空港から標本を出すのはトラブルなくすみ、新潟行の飛行機に無事乗り込むことが出来た。

最後に、今回の日本側の参加は北大水産学部尼岡先生の下におこなわれた。困難な準備をされた先生に改めて感謝申し上げます。